青木健著

『マニ教』(講談社選書メチエ)

講談社, 2010年11月, 281頁, 定価1,800円+税

戸 田 聡^{*}
TODA Satoshi

本書は、ゾロアスター教研究者であり2007年1月に処女作『ゾロアスター教の興亡』を上梓した青木氏の、はや第5作ということになる。まず何よりも、本書が青木氏の恐るべき知的生産力の証しであることは、なんびとも否定しえないところだと言えよう。

「キリスト教がもっとも恐れた謎の世界宗教」たるマニ教「の全貌」を示す「世界初の包括的入門書」——出版社の編集者が書いたとおぼしき帯の表現にある、本書の宣伝文句である。最初これを見た時、少々誇大宣伝ではないかとの印象を評者は持った。巻頭のマニ教関係図(「地図② 20世紀(第2次世界大戦後)のマニー教写本発見マップ」)に日本が含まれるからといって、「世界初の包括的入門書」だと言うのはいかなものか、と。

だが評者は、一読した後、なるほど本書は世界初の包括的入門書かもしれないという感想をいだいたことも告白しなければならない。もちろん、国際的に流布した定評あるマニ教概説はこれまでにいくつかあった。中でも、西方伝承(ペルシア以西～ローマ帝国の領域)と東方伝承(ペルシア及び以東～中国)の2つに大きく分かれて行なわれてきたそれまでのマニ教研究の両翼を概観した S. N. C. リュウの概説⁽¹⁾(氏の名前の漢字表記が「劉南強」であることを、評者は青木氏の書から教えられた)は、二次文献だけで800を超える著作・論考を列挙した圧倒的な文献目録と相俟って、マニ教研究を新たな次元へと引き上げた、研究史上画期的な著作だった。これに対して、青木氏の書の文献目録で挙げられている文献の数は140ほどであり、その限りでは、リュウの著作が往時⁽²⁾有したであろうインパクトが青木氏の書物にあるとはいいがたい。しかし青木氏の書物は、氏がイスラム学専攻という形で研究を始めたことに由来してだろう、マニ教概説においてふつうとりあげられないイスラム世界の中のマニ教にも触れている。これはリュウの概説が十分に扱えていない領域であり、確かに青木氏の書のほうが広い視野を確保している。その意味で、本書は実際「世界初の包括的入門書」かもしれないのである。視野の広さへの青木氏のこだわりは、中国のマニ教の歴史に関して明教^{みんきょう}まで追いか

* 一橋大学特任講師
Lecturer, Hitotsubashi University

るあたりにも現れている。

付言すると、入門書（だけでなく、一般に学術書）に本来望まれるのは、当該著作に註が付され、その結果、同書の読者が迅速に研究上の論争史に分け入れるようになることだと思われる。⁽³⁾この点に関してリュウの著作と青木氏の著作を比較するなら、前者に軍配を上げざるをえない。ただ、これはもっぱら当該叢書（つまり出版社側）の編集方針にかかわることであり、この点で青木氏を責めるのは酷だろう。また、青木氏自身は所々で、叢書の編集方針に反しない形で（つまり、註番号をつけ註を付するのではない仕方）自らの典拠を明記している。氏のそのような配慮は（残念ながら著書の全体に及んではないが）正当に評価されるべきだろう。しかしその上で言うなら、これは青木氏個人の問題というよりむしろ研究者一般の問題と言うべきだろうが、註のない学術書（本来これは形容矛盾である）を巷間に流布し氾濫させることは果たして良いのかどうか。註を付さない学術書の執筆を出版社側から求められた場合、我々研究者はもっと毅然たるべきではないだろうか。近年そのような「学術書」が多すぎるだけに、このことを再三考えさせられる。青木氏のように力のある著者にも、この点は今後お考えいただきたいところである。

本書の叙述の仕方について一言しておく、青木氏は時として揶揄的ないし皮肉的な書き方をすることで、叙述対象たるマニ教に対して距離を置いている。叙述対象に対して著者がどのような距離のとり方をするかは人によって無論様々であり、その善し悪しを言うつもりは毛頭ない。ただ、そのような距離のとり方が叙述に独特な色彩を与えることは明白であり、（青木氏のすべての著書に目を通してはいないので評者は想像するのみだが）既に青木氏はそのような文体（すなわち、そのつど著者がひょっこり姿を現す文体）という点で独特なものを確立しているのかもしれない、と評者には思われた。対象に対する青木氏なりの距離のとり方ないしは批判精神が、そのような文体を通じて表現されているのだろう。ついでに言えば、青木氏の場合、そのような批判精神は自らに対しても発揮されていて、本書の中で「青木とかいう研究者が」（161頁）というやや揶揄的な自己言及となって現れている（もちろんこの言及は、並みいるマニ教研究者の中に自分を含めるという意味で、著者の矜持をも示しているのだが）。読者は、単に内容だけでなく叙述スタイルの点からも、本書のたくらみを味読することができる。

叙述の仕方について、本書の分析視角との関連でもう一言付け加えておくと、青木氏は、ゾロアスター教研究者としての自らの立場を堅持したペルシア中心的な視角に基づいてマニ教を扱っており（「ペルシア中心的な視角」についてはさらに後述）、明らかに本書の叙述では、西方伝承より東方伝承が重視されていると言える。また、国際マニ学会が数年おきに開催する学術大会の会議録の比較的最近のものに収められた諸論文を

効果的に活用することによって、本書の叙述の中にはマニ教研究の現況が巧みに織り込まれている。さらに、研究の比較的手薄な「イスラム世界の中のマニ教」については、未公刊の学術論文（比較宗教学者 C. コルベの若き日の学位論文）を参照して、踏み込んだ叙述が行なわれている。青木氏による一次・二次文献の捌き方は実に見事である。

プロローグ（21～34頁）ではマニ教という宗教の性格規定が試みられている。「人工の宗教」「書物中心の宗教」「神話的表象の宗教」というのがそれであり、このうち「神話的表象の宗教」については、マニ自身は自らの宇宙生成論（本書第3章で扱われている）をいわゆる神話（すなわち作り話）とは考えていなかったと思われるので⁽⁴⁾、マニ教の自己理解と相当異なる外在的な見方だと言える。ただ、青木氏の強調点は、「神話的表象の宗教」との規定を通じて、マニ教は先行の様々な宗教の教説・イメージを換骨奪胎していると主張するところにあるのであり、その意味で「神話的表象の宗教」という規定には少なくとも分析上の意義があると言えよう。次に、「第4の世界宗教？」という見出しで青木氏は、宣教による拡大の規模から見ればマニ教は世界宗教と呼んでも差し支えなさそうだが、しかしマニ教は「宿主あつてのファージのような宗教にすぎず」、さらに「動かしがたい事実として、天山ウイグル王国の国教に採用された一時期……を除けば、マニ教が確固たる基盤を築いたことは歴史上一度たりとてない」（29頁）と論じている。この指摘（特に後半部分）は極めて興味深い。すなわち確かに、いわゆる世界宗教（仏教、キリスト教、イスラム教）は、いずれかの時期に政治的大国の国家宗教として庇護を受けた歴史を有する。しかし、或る宗教が世界宗教となるには、必ずいったん国家から特権的扱いを受ける宗教にならなければならないものだろうか。むしろ、或る宗教が真の意味で世界宗教（つまり、普遍性を獲得した宗教）だと言えるのは、当の宗教が他の力（例えば政治の力）を借りずに独力で拡大を果たした場合だ、と考えるべきなのではないか。マニ教自体が世界宗教に当たるかどうかはともかくも、世界宗教という概念（或いは宗教の伝播力）との関連で、やはりマニ教という宗教は必ず考慮せざるをえない存在だと言えるのではなからうか。「消え去った宗教」（30頁）とはいえ、マニ教を研究することの意義は決して少なくないと評者には思われる。

第1章「マニ教研究資料の発見史」（35～62頁）では、マニ教の東方伝承と西方伝承のそれぞれにかかわる、主に20世紀になってから発見された諸資料が概観されている。評者は、青木氏はここで、マニ教のペルシア語文献の研究の大家だった W. B. ヘニングのことをもっと書くのかと思っていたが、案外短い記述しか見られなかった。ペルシア関係のその他の研究にも通暁している青木氏は、マニ教研究の大家という限定的な仕方ではヘニングを扱いたくはなかったのだろう。ところで、この章で驚いたのは、言及される一々の学者の生年が、及び鬼籍に入った学者についてはその没年も、ほぼくま

く記されていることである。今日では Wikipedia の諸語版を使えばこういう調査は門外漢にも或る程度可能なのだろうが、それにしても青木氏の徹底して調べ上げる姿勢を目にすると、他の面でも氏の調査の徹底ぶりが想像される。但し、マニ教研究の嚆矢にして我が国における稀覯文献として42頁で挙げられている I. de Beausobre, *Histoire critique du Manichéisme et du manichéisme*, 2 vols., Amsterdam, 1734-39 や G. Flügel, *Mani, seine Lehre und seine Schriften*, Leipzig 1862, 及び（たぶん青木氏は、骨董的価値しかない著作とみなして無視したのだろうが）F. C. Baur, *Das manichäische Religionssystem*, Tübingen, 1831 は、今日では幸いインターネット上で無償公開されている（<http://gallica.bnf.fr/> 及び <http://www.archive.org/advancedsearch.php> を参照）。

第2章「マーニー・ハイエーの生涯」（63～128頁）では、マニ教の創始者マニの生涯、特にその前半生が、ケルン・マニ・コーデックス（CMC）などに拠って語られるが、後半生に当たる「栄光の教祖時代（26～56歳）」（96～120頁）の相当部分では、マニ自身の生涯でなく彼の直弟子たちによる伝道活動のことが記されている。マニの後半生について伝える資料が乏しいという事情に鑑みて、致し方ないところではあるが、後に「マーニー教教会史」が別途語られるのだから、直弟子たちの伝道活動の話はむしろそちらにまとめてもよかったのではないか。なお、このあたりでは「巡錫の徒爾」（111頁）、「荏苒」（117頁）などという、浅学の評者には見当もつかない漢語（さらに170頁では「挂錫」という単語）が散見され、面喰らった。ペルシア語他の印欧語だけでなく中国語（漢語を含む）をも自在に操る青木氏の学識には驚嘆するほかない。

どのようなマニ教概観でも、光と闇の戦いを軸として展開するマニ教の教説の紹介が中心的位置を占めるのは当然であり、本書でも第3章「マーニー・ハイエーの啓示」（129～166頁）は、ページ数こそ多くないが中心的位置を占めていると言ってよい。ここで注目すべきは、上述のように青木氏が「ペルシア中心的視角」から、マニ教の教説（或いは神話）をペルシア語伝承を中心として叙述していることである。というのも、通常は、特にテオドル・バル・コーナイのシリア語著作に拠ってマニ教の教説を紹介した F. キュモン⁽⁵⁾の論考以来、シリア語伝承、及び、青木氏も言及するイブン・アン・ナディームが伝えるアラビア語伝承などを基に、マニ教の教説が描かれることが多いからである。この点に関して青木氏は、マニにとって使用可能な言語が「東アラム語＝シリア語」（70頁）と中世ペルシア語（氏自身の言い方では「中世イラン語」）の2つだったこと、及び、（『シャープフラガン』であれ『巨人の書』であれ）マニの復元可能な著作のいずれもが中世ペルシア語版であることを理由に、ペルシア語伝承を基に叙述を行なうと述べている（131頁）。実際には、中世ペルシア語よりも遥かにアラム語（＝シリア語）こそがマニの第一言語だったというのが通常の理解であり、しかもそのアラム語

の一方言であるシリア語による資料が存在するので、青木氏のこの説明は必ずしも説得的でないように思われるが、氏がペルシア語伝承を中軸に据えた理由はどうもそれだけではないらしい。つまり青木氏は、マニ教とゾロアスター教の関係について独自の見通し、すなわちマニ教と同時代のゾロアスター教に見られたズルヴァーン主義がマニ教に影響を与え、そしてそのマニ教がゾロアスター教に影響を与えた結果、ゾロアスター教が二元論的な体裁をとるに至った、という見通しを得つつあるようであり、そのような理解を提示しやすくするために「ペルシア中心的視角」を採っているようなのである（本書162頁の表で説明されている）。上述した青木氏の自己言及もこの文脈の中に位置しており、氏の深謀遠慮が窺われる。

ただ、付言するなら、そもそもマニ教の教説が基本的に何に依拠して成立したかについて、第3章第7節「マーニー・ハイイエーの思想の意義——先行諸思想と独自性」（154～166頁）で青木氏が展開している議論はやや物足りなかった。特にキリスト教との関係や、グノーシス主義との関係が簡潔に過ぎるようである。もとより、簡潔さの真因は、この問題を主に考えるべきキリスト教研究者（評者自身もそのはしくれである）の側の不手際にこそあるのだろうが、とはいえ、グノーシス主義研究の中では、青木氏も156頁で触れている「イラン型」と、（こちらには氏は触れていないが）「シリア・エジプト型」という、グノーシス主義の2つの型を立てる議論が今なお見られる。そして「イラン型」という言い方の背後では、マニ教への二元論的ゾロアスター教の影響が今なお暗黙裡に想定されている。このような事情を思うに、ゾロアスター教研究者の側からの発信は、たとえグノーシス主義研究の従来のある方への批判であっても、貴重でありかつ大いに希求されているように評者には思われる。青木氏の一層踏み込んだ発言に今後期待したい。

第4章（167～185頁）は「マーニー教の完成」とあるが、組織としてのマニ教の整備などを扱ったこの章が、第5章から第8章にまで及ぶ「マーニー教教会史」の端緒を成すと見てよく、マニ教の儀礼やマニ教の芸術など多彩な事項・資料を扱った本章も、短い章ながら著者の実力のほどを示すものとなっている。ただ、上述のペルシア中心的視角の弊害（とあえて言うべく）もここでは現れている。すなわち、マニ教の教会の位階制度がペルシア語及び中国語で説明され、「フェレスタグ／承法教道者：12名」「イスパタグ／伝法者：72名」（172頁の表）などとなっており、これでは何のことかわからないが、この位階制度については、イエス・キリストが選んだとされる「12使徒」及び「72人の宣教者」（ルカによる福音書10章1節を参照）を踏まえて作られたものであらうことは疑いない。少なくともここでは、青木氏も「ペルシア原理主義」を緩めて良かっただろう。

第5章以降の「マーニー教教会史」の中で評者が論評できるのは、キリスト教が関係する第6章「マーニー教教会史②——ローマ帝国」(203～216頁)についてのみであり、しかも明らかにこの章は他の章よりもそっけなく書かれている。もちろん、キリスト教研究者の側としては、青木氏がこの領域を耕し切らずに「鋤き残し」を残してくれたことに感謝して自分の仕事に励むべきなのだろう。人名について記しておく、117頁「アレクサンダー・リュコポリス」は204頁「リュコポリスのアレクサンドロス」と同一人であり、表記は後者に統一するべきである。また、211頁「プリシリアン」はラテン語形で「プリスキリアヌス」と書かれるのが通例である。その他、近現代人の名前の表記に不適切なものが若干あるが(57頁、ニーベルクでなくニーベリ、211頁、リジク・シッパーでなくレイク・スヒッパー)、本書が扱う人名の多種多様さを思うなら、これらは弘法の筆の誤りでしかない。もう1点、第3章の記述に出てくる「生ける精神」(135頁他)は、マニ教とキリスト教の比較対照の可能性を考慮するなら、「生ける霊」とするほうが良くなかったか。

「やがてこの天山ウイグル王国でも仏教勢力の反撃が始まり、一〇世紀後半にはマーニー教が国教の座から滑り落ちる時が来た。すでに一〇世紀にはメソポタミアのマーニー教教会が減んでいるので、これが組織宗教としてのマーニー教の最期だった。……マーニスターンと大量の写本・ミニアチュールはトゥルフアンやベゼクリクで砂に埋もれ、二〇世紀初頭にドイツ・トゥルフアン探検隊が発掘するまで、誰にも知られることのない眠りについた。作家の井上靖(一九〇七～九一年)が詩的な形象で表現したとおり、世俗権力に優遇されることのあまりにも少なく、彼方にある光の世界への帰還を説いた厭世的な宗教に相応しい終焉だった。そして、ここから舞台が一回転し、本書第一章第一節に記した……不世出のイラン学者ヘニンクが辣腕を振るった写本解読へと話は繋がっていくことになる」(243～244頁)。自らの教えの永遠性を信じかつ語ったマニの宗教の終焉が、見事な文学的筆致によって語られているが、マニ教は、仮に「永遠に滅びてしまった教え」(259頁)だとしても、既述のように様々な理由でなお知るに値し、研究に値すると言ってよい。また、マニ教の魅力の相当部分はその創始者に由来するのであり、マニ自身に対してもっと関心が寄せられてよい。これに関して、まさにそのマニを主人公とした小説が翻訳出版されるなどという話もあるようだが、⁽⁶⁾ともあれ様々な形で、マニ及び彼の宗教が人々の耳目を引くことを、そしてそのために本書が多く読者に迎えられることを、(以上縷々評言を述べはしたが)評者としても心から期待しつつ、拙評を終えることとした。

注

- (1) 同書初版(1985年刊)は青木氏も引用しているが、今日では同書は第2版(S. N. C. Lieu, *Manichaeism in the later Roman Empire and medieval China* [Wissenschaftliche Untersuchungen zum Neuen Testament, 63], 2nd ed., rev. and expanded, Tübingen: Mohr Siebeck, 1992)によって引用するのがふつうである。
- (2) 当時既に、マニ教研究の著しい進展のゆえに、全体を見渡したマニ教概説を一個人が執筆することはもはや不可能事だと考えられていたようであり、その意味で Lieu の著作は瞠目に値するものだった。
- (3) 例えば、本書とやや異なる分野になるが、ビザンツ史の概説として定評のあるオストログルスキーの著作(邦訳は和田廣訳『ビザンツ帝国史』, 恒文社, 2001年)はまさにそのような概説書だった。
- (4) Lieu, *op. cit.*, p. 31 を参照。
- (5) F. Cumont, *La cosmogonie manichéenne d'après Théodore bar Khôni* (Recherches sur le manichéisme, 1), Bruxelles: Lamertin, 1908.
- (6) アミン・マアルーフ／戸田聡訳『光の庭——小説 マニの生涯——』, 連合出版。2011年2月刊行。